



源氏辨抄

六





花宴

春の詞といふと但詞は南殿の橘乃宴せさる
あり花宴といふきあら詞いふ日中花と
いふ橘とあら支那は花といふ牡丹のより源氏
君十九歳乃まのものや

南殿のさくらのえん

南殿紫宸殿中殿法涼殿

花鳥云延長元年二月十七日清涼殿花宴詩題
櫻繁春日斜探歌作又御遊のよりありけり
南殿の橘を以て宴といふ法涼殿に海へせ
てけりといふべきや

とぞう

實枝云入月ふんあり二月廿日ありの

月いふ頃ちと入とりて處て臘月卒のゆきもさう

ぬき入月といひうてけ女け出もさうぬき

上旬いふ女の時とせむのうと吟さう月のをさ知

やかく吟ぜりやへささへい流氏のふ入月のとく

大さうさういふとや

あひくらや例るうさうらん

梵網經曰佛子故飲酒而生酒過失無量云

毘婆沙論曰五戒ヲ受持沙門器中ニ酒アリ如

渴ノ為ニ所逼テ水也ト思テ飲之醉テ五戒共ニ破

隣ノ鶏ノ来ルヲ盗テ殺シテ食ス隣ノ娘鶏ヲ尋テ来ル

是ヲトラヘテ交會ス姦戒ヲ破ル隣ノ家ニ拒諱ニ誣

語戒ヲ破ル

いづれぞと落乃宿りとらんまにあざが原に用もさあけ

あざい小隙や帯はいとぎいとさうていせどけさう

アミそくつひ付たり。あけとふさうずれへそと之

いきてゐる法や

あきさしとさうーにさう入て

花多云松永式部

能記子ゆら人乃扇とさう入てと中り又東城

詩云換扇惟逢春夢婆とゆさう春夢入婆の世乃

異名也唐に史婦の約とすきしに廟とあり
うろもあり垂乳の江云々歡廟といふあり又方乳
久しう

臥中ぬのすまめ

不肯 日本 不愛

第本卷云衣乃わいのつらうけづき給ふわいの
け君も抱くくしてま

廟い橋乃三重がよ

拾廟のあがれ上三役づと橋の

荷様とてつと色この糸にて固てまはあらびむび
よむびこれうやと實枝云流ききはうとめ
乃橋廟とて元服してより十六まで同入徳の糸五

色はらうりと巻つけて持人要い金にて蝶と
らんじとび花を耐のとつけん

世よとめらうとすれま羽の月れ糸と糸よ海で
細流云源氏の中にも秀逸く又文字はあき
下句月よととめらうととや花鳥云けと
れて言水僧正慈圓の寺よ

ま羽の月乃糸と糸とを野とれ鏡にさへりける
六百番寺合後成郷の判詞云は式部へうらむ
うりもゆく筆い異よは緒の上花宴巻い異よ
めく源氏んが寺よとへ遺恨もやと

やうにぬるぬるしてゐる

やうに
なま
る
か
い
ふ
じ
と
ら

催馬楽
疎
貫川

如き川の津^セのやうな枕^{たまくら}やうなぬるおひなく

て親^習之^所に

二階
切やうきる妻はすゝくもあつてけふ知れ

の帝に齊かいようん

^三
⁰¹
 留^{ちう}かゝる。らび乃ろきとく。う。う。を以て。うん

も^りき^り之^りか^りよ^りん

貫川濃川の名を承^{うけた}り
濃^ノ川の^{うへ}に^まつ^る浪^{なみ}の^うた^へに^まつ^る浪^{なみ}荒^ある

しゝ寝衣やいふきやすゝくあり有けりや

一義ニありト辭字トてゐル照スやハやハびクるルぞハ云フ

一 河國くわのくに矢作やさくの里さとの市いち也。

やん来^えや。らふと皆^ちのほひや女の皆^ちに男^{おとこ}の

より少く^{まづ}う^と一^い辞字^{しじ}。う^もい震^{しん}と^と襦^{じゆ}と^と宮路^{みやぢ}と^と都^{みやこ}

の通へ又三河國宮崎山也

わくわくあふくやうにうれしくなるとされて咳払いを

凡そ人も此堂の襦衣外の散らん垢をうすし

此奇は正統の人々を
通じてあり

かげもかくせ
夜花^{やの}はかげゝる
縁^え縁^ど之^の二^{ふた}葉^は春^{はる}

忠臣公

咲花の下にうき人となりありにまらぬ夜のほろも
扇とそられてかきめをえんと

催馬樂 呂 石川

石川の高廉人よ帯とそれてうきをえ
うき帯を花田乃帯の中い絶えり

石川の賀茂のふみへうき後悔く。花田のふみへ
帯を扇とそひて扇乃にまらせん

うきうきませうき花の月をえりあはれりや
花鳥云云十代 圓融後集より後の比
後らせほひて

うき花の山をうき入時あやうき物ぞありけり
ゆき 宮

うきうきうき花をうき入時あやうき物ぞありけり
實枝云いあそり結時乃もや今後氏もう結
た可おあや

葵

葵の
名

ともや人のふせらあひゆ祢のやうに
又なを系とせし中一ゆ号也。源氏廿一歳より
廿二歳乃正月とあり。源氏十九歳の正月より廿
歳の一年乃より石記に弓子朱藤院即位。大嘗
会。冷泉三坊。毎定卜定。毎院御禮。源氏但太
将以上六條とあり。但着菜奏子廿一。一
て宰相より大納言よりあり。け葵の初より
やんともあもろ。やとあり。但大納言よりや

内男乃やんごともふもふや

但大府のゆや

花鳥云大府の参儀より座相までも魚帯する職也

源氏もけし参儀大府や

参儀の唐名は宰相といふ並相といふ大府の唐名也

細流云榮花物語に十九。大府といふ位中府宰相より

せはて大府けをせはひつ宰相の大府と云えさる

つとめてく今めうー

百寮訓要抄云執柄之家の人を殊執と云職也

大府のよりの近侍大府といふ凡人の人といふ達といふ云

唐名は羽林大將軍といふ員矢少へ羽林といふ。但

大府は兼大將といふ方と云と衛府太刀といふ大府は

文官の極也大將は武官の極也大府の大將は又

武官の極也又唐名を幕府といふ幕一帳と

家とするの故に宿府といふ宿人の居舎と府とい

大府といふ府のふといふ大府は督中少將は佐將

監尉將曹は志といふ也大樹といふ周亞史の洞

柳堂といふ陳といふり大柳と大樹將軍といふ

一より号と相當後三位也

ひくいもやね我より進み人

西白河也夜壺

中々といふ

我々一人と云ふは、いふやうな人のことであらう

齊宮 （イハ） といふは、いふやうな人のことであらう

皇六年以天照太神託豐鋤入姬命祭於倭宜縫

邑仍立磯堅城神籬（イハ）云

同第六云十一代垂仁天皇二十五年三月離天

照太神於豐耜姬命託于倭姬命爰倭姬命求鎮

坐太神之處而詣菟田筱幡更還之入近江國東

迴美濃到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰是神

風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可憐國

也欲居是國故隨太神教其祠立於伊勢國曰興

齊宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照太神始自

天降之處也（イハ）崇神六年ヨリ垂仁二十年

同第七十二代景行天皇二十年二月遣五百野

皇女令祭天照太神（イハ）云垂仁二十五年ヨリ景行

二十年ニテ九十五年也。豐耜倭姬五百野皆皇

女也是ヨリ代々皇女ヲ伊勢へ奉テ宮仕セシメ至フ

延喜式第五齊宮凡天皇即位者定伊勢太神宮

齊王簡内親王未嫁者卜定若無内親王者依世

次簡諸王女卜定（イハ）云

垂仁天皇時スエミ太和姫神代ノキミトヒメカミヨヨリノ神鏡神劔ヲ取テ、
伊勢ノ宇治ノ川上ニ鎮坐シ玉フ御裳濯川ト云六、
和姫ノ裳ヲアラヒシ故也河上ニ五十鈴アル故ニ五、
十鈴川スズガハ云是ヨリ五十町川下ヲ宇治ト云今内宮
也。二十二代雄略天皇二十二年ニ御託宣アリテ。
丹波ノ与佐ヨリ豊受ノ大神ヲ迎テ伊勢ノ度會郡
山田原ニ勸請ス。今ノ外宮也。豊受太神トヨケ天神ノ始ノ
国常立尊也。此時迄大和姫存生シテミレヌナリ。
日本紀并神皇正統紀ニ見タリ。垂仁二十五年ヨリ
雄略二十二年迄四百八十三年也倭姫長命也。

詞林採要抄云皇孫尊ヲ天照豊受太神宮申也
地神三代天津彦火々瓊々杵尊也丹後餘謝郡
奥井原オキイハラミレヌ云 早三代元明帝和銅六年割丹後五郡爲丹波国
松岡大夫記録曰五十鈴川邊ニ八十二年御鎮坐
アリテ。十二代景行天皇八戊辰年御子ノ玉柱屋
姫命ニ讓テ内宮ヘ御遷座アリシ也。磯宮イソノミヤヲ伊雜
宮イソノミヤ磯邊御前トモ奥院トモ云皇ノ字ヲモ奥院ヘ勅
許アリシ也。磯宮ハ衆生ヲ守玉フ天照大神ハ地ヲ
守玉フ。豊受大神ハ天ヲ守リ玉フ。五十鈴川ノ橋ヲ
ワタリテ。一ノ鳥井アリ。四十末社也。内宮ヨリ。五十

町奥也此間二神路山アリ伊雜宮ノ領也内宮四
十末社宇治橋ヲワタリテ二ノ鳥井アリ外宮四
十末社三ノ鳥井ト云宮川ヲ御手洗川トス三宮共
廳官三職神主百二十人アリ。關原陳之後九鬼
長門守伊雜宮ノ所領ヲ横領シテヨリ神人モ杜モ
絶テ地ガカリ也此時四十末社ヲ内宮へ遷取テ今
ハ内宮八十末社トシテ神人領ズル故ニ伊雜宮神人
武家へ訴訟スレ内宮ノ衆ハ古代ノ事不知トテ請
引コトナシ云家隆集ニモ伊勢三宮十五首ノ會ト詞
書アリテ哥アリ。又天照太神ノ御子五男三女ヲ

ハ王子ト号ス此中ニ五男ハ素盞烏尊ノ御子ナ
生シ玉フト天照ノ御子ニ成テ養玉ヘリ三女天照太
神ノ實子也

神代下卷十枚ニ玉作上祖玉屋命ト申スハ玉柱
命ノコトハ見ユ

ふ乃すまひはぬをせかくす此ほどすうい
りこれおひぬへきうくとわくこれあつれ
又帝源氏のお色を戒め
人のためわづきもあつれものあつれ
あつて女のうみおまひそのあつ

中妻乃外よ人より妻あらむらうにほふま
 る法ありて礼とむじうの嫌妬あへて不悦する
 るく源氏のごく中妻と外様はあひらひ同
 けもの戒をづけ戒まりけられ義義うゆ
 ま人のさみづよりけり又我が法を
 まじりて天命はつきはけの難あへり今又帝の教
 訓いひ給ふればいふ前より好むはけり我の
 人の趣いふ見知り我力の趣いふ世の
 趣とあらうて戒せり
 わづれていづとめりやうかへ給ふ

帝の御詞もいふれ六条の文もよき
 せんといふあはれ御まていふ人けりそ又世
 の祈とくまらうかの趣とく人の
 むまむといふいふ御まていふ人けりそ又世
 の趣のらくは改へてあはれを改む
 そふ人のさへも君の法とて改む
 権乃権なりて人なれとてあはれ
 そいふあはれけり人乃権なりてあはれ
 似せぬとて我力とていふ人なれとて
 賢賢のなり

御襖

御上巳臨水

こげいとむく

名目抄
見之

船名遣の中とみけいとありそい説と音之用

三代實録茅三曰契民齊於鴨水邊待賢門來依

契并入初齊院待賢門と東西へ東京極通

一系大路より六町南くこの東西へ中御門と通く

假よめづーやせて

煙と遠きゆり妻子と川具ー凡物より群集場

にひかりと凡物場を定より凡病人世世の

危より世とけて万人居定とて假よめて権

門と云ふひのけ人のわけきとくうと云我一人

目と云うとてすゑ石義の極や災い下よりとて

ろといひあづ母大まのあまなりや

あすすれ 煙と帷裳と中や簾の肉は絹と二幅

けて式時あへけて中とけけ定やすその

あまなり簾のあ乃下へ出てさびなく

かめあづや 師云多人教の諠譁い理非とも

あづど制止もあづさびなくおあふ斗あり

めく人の教や

まじ 師云合韻器門牀！玉篇云麻狹而長

目やうい半を放つ時半のううよ轅と拍する

ものし又女車^{にんごくるま}をいれ糸^{いと}下のあまへとす小机^{こぎ}のま

車乃^{くるま}どう

^{都登切吳音ハ濁也車羽也}

舟^{ふね}は胴^{どう}乃^{なり}ちとひいせん中^{なかつ}や人の^{ひと}胴^{どう}も男^{おとこ}をひ
は車^{くるま}の床^{とこ}とて胴^{どう}とひまや或^{ある}は輶^{きう}と入^{いれ}輶^{きう}
とひの輪^{りん}の中^{なかつ}あり輶^{きう}の中^{なかつ}にあり輶^{きう}のま
はて輶^{きう}とすふと胴^{どう}とひ車^{くるま}やそに輶^{きう}の半^{はん}
は^はす^すふの輶^{きう}とひ^ひて^てり^りを^をせ^せる^るや
輿^こ車^{くるま}と輶^{きう}のまのや
今^{いま}は輶^{きう}と胴^{どう}とひ輶^{きう}の中^{なかつ}
は丸^{まる}織^{おり}と紅^{こう}とひや

そのくまにさよほつねい

^{いのかまはくく大和名也}

右^{みぎ}今の^{いま}は神^{かみ}樂^{らき}は日^ひ神^{かみ}と請^{うか}うて^ては^はり^りは^はと
ふふ^{ふふ}と家^{いえ}を^をた^たる^るの^の方^{はう}け^けや

目^めもあや^{あや}の^の海^{うみ}くら

う^うく^くき^き物^{もの}の^の又^{また}

とみ^{とみ}く^くと^とや

^{は括弧後れす}

江^えの^の錦^{にしき}と^とふ^ふと^とあ^あり^りと^と目^めも^もあ^あや^やは^はと^と成^{なり}ぬ

そ^そい^い江^えの^のら^らと^とあ^あや^やは^はと^とあ^あり^り家^{いえ}の^の後^{あと}の^のは
や^やふ^ふら^らる

殿^{との}の^のぞう

殿^{との}の^の花^{はな}人^{ひと}の^のお^お監^{げん}と^と蓋^ぎと^とひ^ひは^は花

人として在るに盛衰ありとて人たるに賢・中・劣あり作
將監せん討將曹そうの志し也

もまもまひいれいありす

論語六顔淵篇曰子欲善而民善矣君子之德風
小人之德草草上之風必偃注云上一作尚加也
偃ミハフ仆也

つがさうぞく 師云小神とつがさうとを打けさる小

神のすくぬあ乃つまを打てむびよすへよさじく
例いへさうくはさうくとみぬ

師云老女わよめ后ご法師ほうしあるのる物もののる群集ぐんしゅう乃場なりばへある

似ねねにねね飛ととさうり

てをつらうていひよあて

細流云宋朝通鑑曰司馬光赴關衛士以手加額
曰此司馬溫公也云

花鳥司馬相如さうしやとある誤也相如漢代人くわんのよの司馬
相公さうこうと云乃字とおなと誤さるもの通鑑つぎん宋

朝の通鑑也

およめけとれすくぐとれあつきはるあまうよめ
つゝいゝもあやさけりあめどかば中らひいさけ
るすへきめのたがいつゝね後子ごしさういひさる

らねん乃せき勢ありあへん

は洞肝^{師云}父や后^ハ府のどく威^い儀^ぎ正しく理^り非^ひなる
いふにせられ付あれ地^ち神^{しん}子慈^じ悲^ひ乃^のあつてい^いあき
あく^あつまり^つ清^{せい}さうい^い西^{せい}一^{いつ}諸^{しよ}人^{にん}の愚^ぐ癡^ちありとよ^よ私^し
欲^{よく}の乃^の曲^{まが}さうのこ^こありと慈^じ悲^ひなり^{なり}い^い他人^{たにん}
のる^るげき^{げき}なりやう^{やう}す。肉^{にく}の荷^のも^もも^も義^ぎとせね
やう^{やう}も^も過^かつ^つ法^{はふ}と^と並^{なら}ゆ^ゆ安^{あん}隱^{いん}や^や仁^に慈^じの^の人^{にん}の^のあ^あま
ア^ア何^{なに}を^を結^{むす}て^てそ^そす^す料^{りやう}の^のす^すゆ^ゆ人^{にん}た^たん^んど^ど正^{ただ}
しき^{しき}ん^んが^が都^とて^て人^{にん}と^と若^{わか}う^うそ^その^の事^{こと}の^のい^いて^て世^よ人^{にん}不^ふ
愚^ぐと^とせん^んと^とや^やの^のい^いも^も。それ^{それ}よ^よあ^あひ^ひて^て世^よ人^{にん}不^ふ

和^わあり^{あり}國^{くに}家^け治^ちさう^{さう}さう^{さう}の^の也^{なり}

論語^二曰^レ礼之用^{ヨクハクハス}和^ニ為^ニ貴^ニ先^ノ王^ノ之^ノ道^{ミチ}斯^ニ為^ニ美^ニ小^ノ大^ノ由^{ヨリ}
之^ニ有^ル所^ハ不^レ行^ハ知^ル和^ニ而^ニ不^レ以^テ礼^ヲ節^セ之^ヲ亦^タ不^レ可^レ行^ハ也^{なり}

女^メ宮^{みやう} 御^ご云^ん 嫁^けせざら^ら皇^{こう}女^{にょ}す^す一^{いつ}ま^ませ^せい^い親^{しん}王^{おう}宣^{せん}下^か

ありて^{ありて}女^メ肉^{にく}親^{しん}王^{おう}と^とい^いふ^ふ一^{いつ}皇^{こう}女^{にょ}す^す一^{いつ}ま^ませ^せい^い親^{しん}王^{おう}宣^{せん}下^か
の^の娘^{むすめ}と^と女^メ宮^{みやう}と^とい^いふ^ふ一^{いつ}皇^{こう}女^{にょ}す^す一^{いつ}ま^ませ^せい^い親^{しん}王^{おう}宣^{せん}下^か
氏^しが^が神^{かみ}代^{しろ}より^{より}相^{あひ}傳^{でん}の^の龜^{かめ}ト^との^のは^はと^とい^いて^て定^{さだ}ら^らる^るの^の
也^{なり}儒^{にう}者^{しや}の^の易^{えき}道^{どう}の^の龜^{かめ}ト^とと^と替^かひ^ひり^り神^{かみ}代^{しろ}より^{より}見^みえ^えに^に
あ^ある^る龜^{かめ}乃^のに^に龜^{かめ}の^の甲^{こう}と^と焼^やて^てう^うさ^さる^るや^や千^{せん}歲^{ざい}
の^の龜^{かめ}あ^ある^るで^で一^{いつ}旦^{たん}一^{いつ}尺^{せき}の^の甲^{こう}あ^あら^らな^なま^まを^を代^{しろ}の^の龜^{かめ}ト

數^{さん}過^ごせり申のきゆへ

ふ^う_ろもいづ^う_ろきんさくみらひをかぬげし奴^{はな}

師云
 漢氏のふらひるを
 のぞく定むれど人知ら^{らう}ず

一は海松こころの音にていふこと

人のきざせりあり
公事根源云神の告あり

人、葵と桂との覆と今日いゝるや

葵と種とりろくろとあり

カ
ぎ
ろ
ろ
ん
ぞ
あ
ぶ
よ

花心見
後撰中
心
家乃目

抱えたりする女の車よりひ
ひてたりける

友人知

乃かゝるハナ氏やうし人の物づひてぞ怒おどろあひてよるど
 乃

夕に^だに^りて^もふ^れあ^ぶ人の^ほひ^よを^みて^は

人へのめ
衆へのめと
同く有名無実と云ふ
今

乃奇子

かたがは、
おもしろく
ゆくゝき
人びとの
あつち
なつち
なれ

けふの調子や

不審歟云々

源肉付ぶとく面つまき人きぬ別の女車に

海峽より舟をとりて
 船へと乗ふと
 同車なるべし

つまねで打とげらるゝいゝもなれど

つゝも海人のいけなれど

河古今

伊勢乃海釣る管の登るやんいらと定むる

けすけ前のつぎうこよりをすゝり次はねらも

うきうきやうよとけちの浪子のやうな人

いさすはま

河古今

遊仙窟云窮思故調人

注云

人

夢魂与鬼通也云

夢魂云けし天や又只冥も

師云

遊仙窟のいゝ執心の念力を鬼界にまけて人

をやめすとわり神明の冥界より吾國ある人

吾果とあゝ人悪因と悪果とあゝ人現世よ

罪もわり死後と罪もありは冥死冥の例目には

陰限うゝ家よとらるゝいゝまゐるもの

いゝまゐりゝ車あゝいゝ

師云

夕良とあゝ人只姫姫のいゝ人れゝるゝ

いゝ権門は慕て人の恨とくゝいゝ天道

の驕とくゝいゝ人よまゝの念力をはまけて

冥界とあゝ末代の人乃戒とまゝいゝ

穴井の水 源氏の水志乃深き契とし

くやゝと波初てゝ浅くは神の如く穴井水

ひさしうらなひきりてわらふるやどみえはる

いひる人をもさすかひる人 前

わいどぬもわらふ根のそはふよ 家牧

雲 宸のふりてけり根のそはふ種はいたにの娘を

息儀ふもさうみ万にひくろをさふられた

執心の基もさ付よて突にるもさふらふ

とさふもくはる秘けり人我といふ事を食り

男はもやのむねなるなり皆事理なるいなる

一理はあつてのゆふれたかやうにいふ

むねは秘力か加へてわらふじつにありて人の

飛とせり

げも力を捨てやふらんと

冬 力を捨ててもさふらんとすなり 妙道

世はひくはりてふみのこに

男女はもを例限る義をさひき理はひてそ

因果をさひきせしむるやみ十八代を孝天皇の

仁和年中は太和國飛鳥貞成富饒とて鳥之安

を信より死して孫の春澤が代に駿馬の背に死

鳥貞成と文子付るを春澤に付て編千束に

買てふやまひ泰より夢は貞成告て云平生我

うるへんの曲るるはり力を減じ仇やとまゝ
 人毎をむねれい心りまぐとるるに立神よりゆへ
 後、法虚火動して氣逆上ゆへられる氣つゝ
 るるを老のひがみといふ老ありふ年乃老るるを
 まげきつゝより老人よりさらず老人の氣やうぐ
 どくするもや

抱ふ人のたまひわいげは何くかろゝものよるん
 抱ふべきの榮も我力よりあぐれ出るむとぞんる
 家のんといふあちやげよといふあちを捨てやま
 るんやうへんさすあやえはとてまゝの相は

あるをいふへ

ひまびもとあよとてぐのつま

むいんつまい誰かさる結いぞしり下ぐのつま
結い

けきと平返誦とて下ぐのつまと結ぶ男いたの下
誦

ぐのつま女いたのつまと結と捨弁抄上あり
捨弁抄

うやうい 接 伝弟二うやういといふ
接

禮記内則篇曰接讀為捷々勝也謂食其母使補
禮記

虚強氣也

たつゝはもとこと

古今素性

時鳥初聲さけいあがれきく直さくもつねをせしむ
時鳥

いふこと同格也河の終はろふめつりきふく將
海にふんてはふらにん付へる人あふ人の
来て共ふけ初色ときけりとのん

水ゆきまつり 沐史記 髪あふぬりし河

古文真寶漢父辞曰新木者必彈冠新浴者必振

衣

あきのつるま 公事根源抄云春三月三日

よりき紀ふむるべきふるれど今秋の陰月とぞ云
るる冬にもふく来はる法司とむせううゆふ
氣官とふくつるまとい秋の陰月とや

あづまいまふく縣民陰月十五日
外官とむせう外官と受領し國守
陰月といふの官と陰月と新昇進する
陰月といふの音あれ下略してらりといふと
目と

いふねあむりのきふひどりふ
源氏とい人連の吊へる来ぬきふりふり
生果もはねふきふりてふくふりふり
人ふにふにあふりふりふりふりふり
ゆふふふふふふふふふふふふふ

丁巳年

五

细

文選第十二郭璞江賦曰神蛟蠃

以テ遊ユビビ

注云

蜈ハクモクモ力計切神蛇也ゴ神蜈蛇也イ蜈蚣ゴ

行見也。

又曰日本紀神代卷下二十八枚云豐玉姬化為

八尋大照罽匐逵地云

弄花云たふひわりく白之腋をひ之立あつる事

由々如神を以て

我々
 今
 酒
 一
 杯
 飲
 ぶ
 其
 の
 後
 一

物忘令曰夫者准^{さへ}父母^{ふぼ}服^{ふく}一年^{いちねん}嫡^{ちやく}子^し生^な

故也云
神祇服忌令云
雖レ三十日服一年十三

七月しちがつ忌日きび二十日にじゅうにち忌服きふくすうふへ十三ヶ月之

妻のし
服が
三月
暇を
十日
輕服
とて
さす

法界三昧普賢大士

河海云大唐西院和尚礼

孫詞云法界之昧魯賢蓋薩云云之昧と梵語也

翻譯 一々 定も 正覺も 又 仏乃 たり 也

大論云稱菩薩為大士と云又三昧と正まさの氣と

寸觀音ハ慈悲と三昧とすろといふ慈悲を永

一 臨上子之念佛三昧と云ふ所
 一 亦之震云

い普賢のこころに法界とよんを明や七日の

佛法も血^ち飲^{くみ}の中^{うち}は
血^ち飲^{くみ}を中^{うち}に戒^{かい}する

平久がれり

師云
前子出矣乃葵之

一と源氏抄^よに引いて文意^{ふみ}のものと我々^{わが}

ねえ、
わが
さう
とす
れあ
うー
との
路ー
ど又

予は之を推して、も推して、たゞ外ありて有ミナ繋と云

志平曰

正月八忌日

きり又世^せ俗^{ぞく}忌^き月^{げつ}と正月^{しんげつ}とふ
二字あづかる言^{こと}ふあり

年^{ねん}始^{はじ}の^のよ^よぢ^ぢう^うい^い敷^しり^りつ^つ人^{ひと}と^とあ^ある^る帝^{てい}の^の

よある一人とある百人のゆゑあるごとく

ねんげん

石膏抄^{ふし}抄^のよ云^い凍^こ肉^{にく}付^つく^る花^{はな}女^をあ^はれ

楓靈帝のぞれとくくふ付づ強へりとわきまめ權養よめでる

子及

世中とかいふのそくはあつたやうな

あひこ

花鳥云鈍^{とん}多^たの移^{うつ}花^{はな}多^たの深^{ふか}る^る云^い

高麗の紙を山とし

毎朝云々成るん

宋玉が神女賦より

とく
劉禹錫が妻と失ふ時の詩を引

宋玉神女賦曰赤帝之季女名瑤姬未行而亡封

于巫山之臺所謂巫山之女高唐之姬旦為行雲

暮クレナカ為ニ行ト雨アメ朝アサ々カ暮クレ々カ陽タノノ臺ノ之ノ下モト

經云

文選十九卷宋玉が高唐賦ニアリ龍楚襄王ト宋玉
 雲夢澤ニ遊ビ時ニ上ニ雲氣アリテ忽ニ容ヲ改メ變化
 シテ山ノヤウニ成ル是ハ何事ト王ノ問王ハ宋玉云ク是ハ
 朝雲ト云ト答タリ又朝雲トハ何ゾト問王フ宋玉ガ云
 昔楚懷王ノ高唐ニ遊ビ疲テ晝寢シ玉夢ニ一人ノ婦ヲ
 見ル婦云ク吾ハ巫山ノ女也君ミニ遊玉ヲ願ハ枕席ヲ
 進ント云王ヨレニ慰メ婦暇申テ歸ニ王ニ對メ云妾ハ
 在巫山之陽高丘之岨且為朝雲暮為行雨朝々
 暮々陽臺之下ト云夢サメテ後朝ニ見レハ言レ如ク雲
 雨ノ形アリ奇特ニ思テ神女ノ為ニ廟ヲ立テ名ヲ朝

雲ト付タリ是カ只今又見ヘ来レリト云タリ李善

曰朝雲行雨ハ神女ノ美也云

有所嗟二首 劉夢得 夢ヲ見テ姪タル故ニ号ス絶句注曰

庾令樓中初見時 武昌春柳似腰支

相逢相失兩如夢 為雨為雲今不知 支韻也

鄂渚濛々煙雨微 女郎魂逐暮雲歸

只應長在漢陽渡 化作鴛鴦一隻毛 微韻也

コレハ劉禹錫婦ヲクテ作ト云リ

紅のつゆりひるいさかき

花多云輕服ハ紅の滑と圓カヨニ十六代一條院

長保三年二月一日定子爲后心喪子御堂関白純
 大逆の下襲と看一治より一見えより政事要
 略子その子細と云らせり云

心喪こころなくと喪なくのフミと素實すじつのゆるりするをよ
火逆かぎやくと赤あかきや
緋色ひいろとくふ字ふじ之火かのきい赤あかと
り哉や

雨とありて、
漢氏の君臣となりて、
劉禹錫といひ、
應長を漢陽渡とし、
其の墓上の石表といふ所の方とも
なりと云ふ。

多分とらてやいんせうんとすうじやう

實按云

けんとおて後拾遺十卷 哀傷予よ小式部の因
 侍り成りて故にま子の侍りてとてよみ
 侍り

和泉式部

どうぞあそびに
誰と遊ぶと
うらんあそび
らんあそび

吹風はついでにふりけよりきぬ涙へ

此詞とて

緩成

風吹雪の事な乃日よきてりく成ゆ我洞子
 俊成定家まどのうへ大いし源氏を村木とせり後
 成卿まごころて日教智子にのこりて後生て天

ゆとちうで果^{くわ}ぬちゆと祈^{いの}まうまは吉^{いざ}の祚^{しん}現
しうち道とてなれて佛道とてあしきより
け物^{もの}後^ごて得^え道^{どう}せにうりう人いあふるべきう
ちうとそれより和^わ平^{へい}道とのづち器^きのなるを
すの風^{ふう}神^{しん}うい作^{さく}やうにのかり道とてうま
ゆとまげきく和^わ法^{ぽう}とりて以^{もつ}教^{きやう}儒^{じゆ}教^{きやう}のとも
下^{した}万人のゆ天^{てん}地^ち万^{ばん}物^{ぶつ}の理^りと事^{こと}のべてちうや
なま入^{いれ}やまにけ物^{もの}後^ごと作^{さく}りちうはまを
とちうで和^わ牙^がの材^{ざい}とけいぬぬるる賣^うのう
入^{いれ}てもとけいけいぬぬるる花^{はな}のひまなと
ゆるすくちあしりの野^の山^{さん}けいじと
絶^たちをなれぬものときりよりぬみされぬと
ていらんせま

石^{いし}書^{しよ}抄^{しやう}出^で云^{いふ}ものときもの物^{もの}とあるもの
うはなや夢^{ゆめ}との忘^{わす}れの中^{なか}うききんて慰^{なぐさ}めん
とてのふとふんて海^{うみ}のふいぬはのむつ
くちうすれだちあふものふいぬとていぬ
あくとちう

いふとてい

祚^{しん}を月^{げつ}うも時^{とき}ぬよりとけい神^{かみ}けつちういぬ

大ら山をいやりやうきまう

肉裏と人肉山と和方にもありけり
 おく大所の直廬ハ禁裏の中
 深氏君のゆとさひやりまされ
 もねとやそのくさの洞ふみ

又云不審抄出云亭子の院辛丑代
字多仁和寺乃水方大内

山と云ふはわづらひし時^{つこの}境中^るの^{をけ}意^{ちやく}捕^し勅^し使^しより来^りて

白雲乃九重このえにふらまよふれ大内山とこゝろありて人不當に出づひづもひたり

とふみーとあひて今津氏の地まゝくありん

とろろとろろのろろ細
弄細

弄細

宗祇
江
澤氏

肉ずきのこゝろへ人たれど大岡山とあり里より
かりきとおとろけく大やうにのろけきなり

之

つぎ人ーりを急まがれぬよ

了き人ーりぞ 義子が知 終上

壺とて改へあゝ
 ちん
 壺へとふのん
 ぐん
 すぐさるべ

好色と疵^{きず}わりあへば様^{やう}の姫君のゆくは源氏よりび
 き流^{きりゅう}とあやつきとくすり好色のおよ密^{みつ}通^{つう}らん
 むき貞^{てい}節^{せつ}と感^{かん}一^{いつ}終^{しゅう}へりさうとてもう久^くい美^み衆^{しゅう}

は女の徳をよりおのゝきあまじけいしおほや
すぐれより女のもぢく

中づきよりこそ

内見ふ由々敷くこそなり。

こそこそ不^ふ及^ふとて^と 塙^{はな}とていけりおほ
るもいやはきりすぐれよりんづよりこそ又^{また}は
ともあがり男女せよ中庸の徳をよりこそ不^ふ及^ふ
るにこそなり

見られくて

みられぬるをあらはれしをあらはれしをあらはれしを
人こそあらはれし人こそあらはれし人こそあらはれし

さうぬへく

古今十九七条乃^{なり}后^{のち}にせ給ひまらる

はらうとげり後^{のち}が長^{なが}なり

秋乃^{あき}にきや

人といふものなり

まらぬ

たのむ新^{あらた}き

泣^{なみ}きふ海^{うみ}をみんがに抱^{かか}りて海^{うみ}くあまめけり
は^はに^にて^て情^{なさけ}と人^{ひと}欲^ほしとて^と 偏^{ひとへ}に^に偏^{ひとへ}而^{して}身^み不^ふ
偏^{ひとへ}とつて戒^いん^んなり^{なり} 儒^に教^{きやう}とて^と 情^{なさけ}の^の所^{ところ}なり
い^いて^て木^き叶^はふ^ふ入^い獄^{ごく}も^も 諸^{しよ}才^{さい}子^し悲^{かな}泣^{なみ}せど^とと^との
も^も一^{ひと}只^{ただ}お^おわ^わりて^て表^{あらわ}へ^へき^き時^{とき}なり^{なり} び^びあ^あげ^げく^く
き^き時^{とき}なり^{なり} 溺^{おぼれ}於^お一^{ひと}偏^{ひとへ}て^て目^めと^と泣^{なみ}つ^つ 返^{かへ}腹^{はら}

と切みどせぬやうなやうにうらぐは死常候
 ゆへにとやうなうらぐはひのこをうらぐはひの
 妹あつとをたゆへへたすれい哭とあらうし今源
 氏君歌はてりや神と礼はねいひや叶う神を
 ちやと又夕良上の死別よりいひ妻の心懸あき
 もる病は叶う喪礼の威儀いききもその位や
 とま事より礼の中にも元服の礼婚礼喪礼と
 偏の太儀とす

人めもつみざうぐーくふふに海よ

た大匠の威勢のうらうらなうけはあまて雲

とちやなりはへり世間万の自然に増長して
 十分にうらうやわらうはへのやうにわいて
 ろのまゝ下より妹あきぐとくくあきも又あき
 とくへい病人あきあきあきあきあきあき
 して重病とあらうとくく又あきあきあきあき
 あきの始とて妹あきあきあきあきあきあき
 くく小盗人の度うとまりて斜にあひ大盗人の
 子孫は刑罰にあふ人もさうまでい血氣調とす
 三千とて十成するともやうく血氣調とす
 三千とて初めりうらぐ

河
末乃落しとの事や世中のさねなりと云

白氏文集第十二
 二日^ニ鴛鴦瓦^{エン アウ カハラ}冷霜花^{ヒヤシゲタニモ}重舊枕^{オモシキマキ}故衾^{コフキ}

古文眞寶前集ニ鴛鴦ノ二字ヲ翡翠ヒスイトス文集フジウ異也コト

古今十六男ひとこの人乃すなは必かならずする積

時ふふふふふふふふふふ

夢をばきうりて玉より毛あきとてに移ん君ぞ也

魂たまわめさごとく

花
一日前ひとも報はらうのうれうらを下さの

ひて大^キ字^ノも^ハせ^ハず^ハ時^ノ乃^ハ子^ノ

い時の花の技も習けしよまど
あそびあそび

二、我あり活氏の詞は昔と云々ワレ人いつてよく思ひ

けつハ源氏と號と云
又義三尤大臣ヲ殿云

た府の病もわがしるまじ人ごまかりしに
抱のついでまゝしるまじせ給ふとや

衾と云ふなり給ふ

可 論語五卿黨篇曰必有寝衣長一身有半 註 孔安

国曰今被也云

研云 大全曰齋寝不以衾致嚴也半以覆足可寝云

鷺鷥被といふ鷺鷥の紋あり錦被也

あこのりらぬ 亥子餅ハ十月二の亥日也

公事振源云餅ハ肉を煮たりそまゝに食ふ十

代仁明天皇嘉祥元年子沙汰ありて大炊記あり

歌又とまつとされども中朝のわづらひに
皆か説とのせし

今世も毎年丹波國のせといふあり肉裏へまゝ

河海云群忌隱集曰十月亥日作餅食之令人

病也

掌中曆曰亥子餅七種粉大豆小豆大角豆胡
麻栗柿糖

人のんそそそ何ら 古今志す

色んえつらつり世の中の人のかたがたを
あつちのんぐらう



